

令和元年 第10回男女共同参画セミナーを終えて

2019年9月15日から17日まで東北大学の川内北キャンパスで開催された日本植物学会第83回大会において、学会2日目の16日に男女共同参画セミナー「じつは強力、博士号！～目からウロコのキャリアパス～」をランチョンセミナーの形式で開催しました。セミナー後半はポスターセッションと時間帯が重なったにも関わらず、150個用意したお弁当がほぼ配布され、多くの方にご参加いただくことができました。

はじめに三村徹郎学会会長からご挨拶があり、植物学会の男女共同参画委員会は10年ほど前までは「若手+男女共同参画」という形で活動しており、若手キャリアパスの問題は当初から重要視されていたこと、最近大

隅財団が実施した企業アンケートでは、博士人材が高く評価されていたことを紹介された上で、3年間の博士課程は非常に重要な訓練の時間であると締めくくられました。日原由香子男女共同参画委員長からは、諸外国では博士号取得者が増加しているのに対し、日本では減少の一途をたどり、特に修士課程から博士課程への進学者は平成15年から30年の間に半減していることが紹介されました。その大きな原因として博士号取得後のキャリアパスの不透明さが挙げられます。このことを示す統計データとして、修士課程・博士課程修了者の進路比較や、ポスドク数の推移や進路などが紹介されました。

続いて、博士号取得後、さまざまなキャリアパスを経験された4名のパネリストをお迎えしてのパネルディスカッション「私たちのキャリアパス」が、井川智子千葉大学准教授の司会のもと行われました。まず、梅村佳美氏（横浜市立大学・木原生物学研究所・URA）より、URA（University Research Administrator）業務の紹介がありました。政府の政策や産業界の動向等の情報収集に基づいた研究戦略の策定、競争的資金の情報提供や申請支援（Pre-Award）、研究予算や成果発表、知財等の管理（Post-Award）、さらに研究成果の事業化の支援など、多方面から研究者をサポートすることで、研究活動の活性化や研究開発マネジメント強化を促進しているとのことでした。2011年から文科省の事業としてURAの育成が始まり、2019年現在では、全国に1,000～1,500名のURAがいると言われているそうです。男女比は6:4位、国立大学のURA採用は博士号取得が条件とされる場合も多いとのことでした。次に桑原明日香氏（JST・研究開発戦略センターCRDS・フェロー）よりCRDS

BSJ 第10回 日本植物学会 男女共同参画 ランチョンセミナー

じつは強力、博士号！ ～目からウロコのキャリアパス～

博士号取得後、アカデミック研究職以外で活躍されている方、逆に一度企業に入った後アカデミック研究職に戻られた方など、多彩な経歴のパネリストをお迎えして、新時代の博士号取得者のキャリアパス戦略について考えます。

9月16日(月) 12:15～13:15 A会場

植物学会会長挨拶
三村 徹郎 (神戸大学・大学院理学系研究科・教授)

博士号取得者の昨今の就職事情
日原 由香子 (埼玉大学・大学院理工学研究科・教授)

企業?
アカデミック?
博士号って使えるの?

パネルディスカッション 「私たちのキャリアパス」

パネリスト:
石崎 公庸 (神戸大学・大学院理学研究科・准教授)
梅村 佳美 (横浜市立大学・木原生物学研究所・リサーチアドミニストレーター)
桑原 明日香 (JST・研究開発戦略センター(CRDS)・フェロー)
西窪 伸之 (王子木材緑化株式会社・木材事業企画部・副部长)

司会: 井川 智子 (千葉大学・大学院園芸学研究科・准教授)

当日朝、先着150名様に受付付近でランチ引換券を配布します。
引換券をお持ちでない方の参加も歓迎いたします。

フェローの業務の紹介がありました。国内外の科学技術イノベーションの動向や政策動向を調査分析し、それに基づいて文科省に科学技術イノベーション政策や研究開発戦略を提言し、その実現に向けた取組を行っているとのことでした。CREST・さきがけの領域が設定されるまでの道筋や、日本のコアペーパー（超高引用論文）シェア 10 位以内にライフサイエンスから唯一植物科学がランクインしていることなども紹介されました。次に、西窪伸之氏（王子木材緑化株式会社・木材事業企画部・副部長）より、日本国内に 15 万 ha 存在する森林資源を活用するビジネスに関するお話がありました。リーマンショック後、企業の研究セクションは生き残りをかけて縮小されてしまったが、ビジネスを成功させるためのビジョンと、研究者が研究を完成させるためのビジョンの間には通じるものがあるとのことでした。最後に石崎公庸氏（神戸大学・大学院理学研究科・准教授）より製薬会社の研究職として申し分のない日々を送りつつも、一度きりの人生なので自分の力を 100%ぶつけてみたいとの思いから、アカデミアに戻ってきた経緯についてのお話がありました。

続いて、総合討論がおこなわれました。会場からの「海外の博士学生は研究のプロとしてお給料をもらっている。日本でもそのような制度を整えていく必要があるのでは」という質問に対して、桑原氏より「在学中の給料支給と卒業後のキャリアパスの充実は、どちらにしても莫大な財源が必要であるため、すぐに実施することは難しい。現在進めている対策としては、コアファシリティの充実がある。コアファシリティにプロフェッショナルなスタッフを配置することにより、博士取得後のキャリアパスの拡充を図ろうとしている」という回答がありました。また石崎氏から「自分たちのころに比べてキャリアパスは充実しており、企業側からも博士人材は評価され始めている。これがもっと進んでいけば、博士課程に安心して進めるようになると考えている」とのコメントがありました。「大学では任期付きの職が増えていると感じるが、これは今後どのように変わっていくのだろうか」という質問に対して、梅村氏より「URA も任期付きではあるが、必要な職務であると認識されているため、今後は増えることはあっても減ることはないと考えている。URA 職をパーマネント化する大学も出てきている」との回答がありました。

最後に司会の井川氏より、パネルディスカッションの総括として、「研究支援的な業務についておられる方のお話から、キャリアパスを改善・拡充していこうという動向が感じられた」「事前にパネリストの皆さんに実施したアンケートでは、進路選択時にはそれほど深く考えていなくても、その後積極的に情報収集し、自分のやりたいことを具体的に提案することで活路を開いてきていると感じた」「博士課程で培われる課題発見・解決能力が、どんな職業に就いても共通として必要とされると感じた」とのコメントがありました。また各パネリストより「博士号を取得していれば海外で活躍の場を探すことも可能」等、博士課程進学に対するポジティブメッセージが発信され、ランチョンセミナーは閉会となりました。今回のパネリストのキャリアパスは四者四様、皆さんそれぞれの持ち場で生き生きとご活躍で、折角これだけのメンバーを集めたのだから、もっと突っ込んだ議論をする時間が欲しかった・・・というのが正直な感想です。しかし、博士課程進学はクレイジーでは

なくむしろ賢い選択である、どんな職業に就いても通用する底力を養うことができる、というメッセージは聴衆の皆さんにしっかり伝わったのではないのでしょうか。

男女共同参画委員会委員長：日原由香子

